



| | |
|--------------|---|
| Title | ＜翻訳＞郭店一号楚墓年代析論 |
| Author(s) | 徐, 少華; 井上, 了 |
| Citation | 中国研究集刊. 2006, 41, p. 6-16 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/60800 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

郭店一号楚墓年代析論

徐少華
(井上了訳)

提要

郭店一号楚墓から出土した各種の器物は、(戦国中期偏晩)と(戦国晚期偏早)の特徴を備えており、そのうち一部の要素は包山一号・二号墓に近く、また一部の要素は包山四号・五号墓・馬山一号墓および九店乙組墓四期六段の若干の特徴に一致する。包山二号墓の下葬年代は前三一六年あるいはそれよりやや遅く、包山四号・五号墓・馬山一号墓および九店乙組四期六段は(戦国晚期早段)の代表的な楚墓である。考古学の断代では、最も新しい出土品をもって墓葬年代の下限とするのが一般原則である。郭店一号楚墓の年代は(戦国晚期早段)とすべきであり、その下限は白起拔郢より遅くはならない。具体的な年代は、紀元前三〇〇年よりわずかに新しい。(原文「具体年代应在公元前三〇〇年稍后不久。」)

一

一九九三年一〇月に湖北省荊門市で発掘された郭店一号楚墓は、一椁一棺を有し、椁内は三室(棺室・頭箱・辺箱)に分かれている。その規格や規模から言えば、すでに発掘された数千基の楚墓や発掘を待つ一万基以上の楚墓の中にあって、特に注意を引かない中小型の墓である。しかし、この墓から原始儒家・原始道家に関する大量の竹簡

〔郭店M1:T4、八〇四枚〕が出土したことによって、国内外の学術界の広い関心と注目が集まった。郭店楚簡の思想内容や系統について激しい議論が行われるのと並行して、多くの学者が郭店一号墓の時代背景について考え、それぞれに異なる説を提出している。

荊門市博物館は当初、「荊門郭店一号楚墓」(『文物』一九九七年第七期)において、この墓の墓葬形式・棺郭の構造や副葬品の特徴の比較・分析を根拠として、「郭店M1は(戦国中期偏晩)の特徴を具備しており、その下葬年代は

紀元前四世紀中期から紀元前三世紀初であろう。」とした(注1)。これはつまり、紀元前三五〇年頃を上限とし、秦將白起が(楚都の)郢を陥落させた紀元前二七八年を下限とする半世紀あまりである。

一九九八年五月下旬、サラリアン教授(ダートマス大)の呼びかけによって、米ダートマス大学で「郭店楚簡『老子』の問題に関する第一回国際学術討論会」が開催された。郭店一号墓の年代について討論された中で、李伯謙氏(北京大)が楚墓の編年と特徴などを総合的に分析し、郭店一号墓を「戦国中期」の楚墓だ」とした(注2)。劉祖信氏(荊門市博物館竹簡整理研究小組)は、郭店楚墓の重大発見・器物の特徴および年代について紹介する際、彼ら(荊門市博)の原報告の結論を重ねて述べた。つまり「下葬時期は紀元前四世紀中期から紀元前三世紀初」ということである(注3)。李学勤氏は報告の中で、郭店楚墓の資料を包山楚墓と比較し、郭店一号墓の時代を(戦国中期偏晩)とすべきだとし、さらに包山一号・二号墓に近づけたが、

「紀元前三〇〇年より遅くはない」とした(注4)。

後に李氏はさらに論を進め、「同出の漆耳杯(郭店M1:B10、下図)に「東宮



之師」という刻銘があることから、彼(墓主)は楚の太子の教師であつたと考えられる(荊門市博の原報告は「東宮之杯」と釈す)。墓の年代から、この太子は懷王の太子横で、後の頃襄王と考えられる。墓主の死亡時期は頃襄王の即位以前である。」とした(注5)。

筆者は当時ハーバードに留学していたため、アラン教授の厚意によってダートマスにおける研討会に参加し、学習する機会を得た。事前に準備していた発言要旨は、楚墓の編年および副葬品の類型学の角度から郭店一号墓の年代について簡単に意見を述べ、参加者に教えを乞うものであった。筆者の当時の立場は、「この墓に残されていた副葬品およびその特徴から見ると、包山一号・二号墓よりも新しく、紀元前二七八年の白起拔郢よりは早い。つまり紀元前三〇〇年頃である」というものであった。

この後、一部の学者らはまた別の角度から郭店楚墓の年代について分析を進め、それぞれの見解を提出した。王葆玟氏(社会科学院)は、包山楚簡中の大事紀年に反映される史実や、紀元前二七八年の白起拔郢より以降の江陵地域における楚文化の継承、および郭店楚簡に含まれる儒家文献の政治的・文化的な背景などを結びつけ、「郭店楚墓の下葬年代は比較的小さく、紀元前二七八年以降、紀元前二二七年以前」(注6)。「この墓は白起拔郢より遅れ

ること半世紀以内のものである。」とした。後に王氏は幾つかの論文でこの立場をさらに展開・補足した^{注7)}。羅運環氏(武漢大)は、この墓から出た漆耳杯の底の刻文を「東宮之師」と定めた上で、原報告の推定年代と結びつけて、「(東宮之師)とは太子横の教師である。……この墓の下葬年代は(太子横が秦から逃帰した)紀元前三〇二年より以降(下限は白起拔郢より以前)である。」とした^{注8)}。

郭店一号楚墓の年代に関する上述のような議論を見ると、研究の深化と楚墓年代学の精密化にともなう、この墓の年代について更なる分析を進めることができ、また進めなければならないことが理解できる。以下では、旧稿を基礎とした上で修訂・補充を行い、楚墓の葬制・葬俗および器物類型学の角度から、この問題に対してさらに進んだ議論と認識を提供し、もってこの研究の深化発展を期待したい。

二

郭店一号墓は数次にわたる盗掘を受けており、墓中にまとまった青銅器や倣銅陶器は見られない。墓中に残された副葬品のうち明確な特徴をもつ物は限られており、年代決定に一定の困難をもたらす。荊門市博物館はこれ

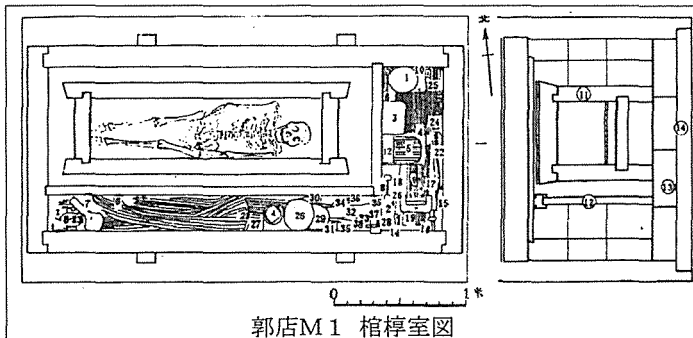
らの限られた資料によって、墓葬の配置・棺槨の構造および副葬品の特徴などを関連資料と比較検討し、この墓が典型的な楚墓であり「その下葬年代は紀元前四世紀中期から紀元前三世紀初」だとした。現在もなお、この結論と年代推定は基本的に正しいと認められる。

墓葬の規格・葬制・葬俗および副葬品の組み合わせと特徴から見ると、郭店一号墓は典型的な中級でやや小さい楚国貴族の墓葬に属する。

第一に、この墓の墓室は長方形の土壙竪穴で、東側中央に斜面となった長方形の墓道がある。

第二に、墓室の中央に棺槨が安置され、槨の内部は木板によって棺室・頭箱・辺箱の三室に分けられている(下図)。

第三に、棺は長方形の



郭店M1 棺槨室図

懸底方棺^{あけぞこ}で、壁板・横板・底板・蓋板はみな組木によつて作られており、棺内には透かし彫りの木牀がはめ込まれている。墓主は頭を東にして体を伸ばし、仰向けに木牀の上に安置されている。

墓道と墓向について見ると、周代の北方中原地区では墓道はおおむね南北を向いており、頭を北とするものが多い。秦墓では墓道はおおむね東西を向いており、頭を西にするものが多い。楚墓では墓道と頭を東あるいは南に向けるものが多いが、比較的高位の貴族や半姓に属する者の墓には、とくに東に向ける傾向が強い。墓主の身分・地位に応じて椁内を木板で二・三・五・七室に仕切るのは東周期の楚墓の典型的な特徴で、中原や秦の墓には見られない。組木による懸底棺を用い、棺内に透かし彫りの木牀を置くのも(戦国中晩期)の楚墓に特徴的な葬俗で、同時期の他国の墓葬には見えず、以降の秦墓にも見えない。

郭店一号墓が備える上述のような楚文化の一連の特徴は、これが(戦国中晩期)の典型的な楚墓であることを示す。椁内をさらに三分する規格と、数次にわたる盗掘を経てわずかに残されていた、金銀で飾られた鳩杖(二点)・鏤空四鳳紋の銅鏡・金銀で飾られた銅鈹(剣の一種)・精巧に作られ華麗な装飾の施された漆棺(やなぐい)・匱(鏡箱)・

耳杯などの精美な副葬品の分析によつて、墓主は楚の下大夫あるいは元士(上士)に相当する、中級や下の貴族と考えられる。

〔郭店一号墓の〕目前に広がる漢水以西の地域、とくに紀南城・楚皇城遺跡を中心とする楚の中心地域の(戦国晩期)の墓葬は、(早段)と(晩段)とに明確に区分できる。(戦国晩期早段)(白起拔郢以前)の墓葬は数が多く、楚文化の特徴によく合致しており、かつ様々な階級の貴族墓が存在する。しかし(戦国晩期晩段)(白起拔郢以降)の墓葬は、第一には墓葬の件数そのものが急激に減少し、第二には高位の貴族墓が基本的に見られなくなり、第三には一部の墓葬において明確な秦文化の特徴を備えるようになる。たとえば紀南城の近くに造営された江陵九店東周墓地では、発掘された五七八基の乙組墓(楚文化に属するもの。周文化に属する甲組墓に対する呼称)のうち、年代的特徴を持った墓は四六四基あり、うち乙組甲類(一椁一棺で、椁内は不分室あるいは二室、まれに三室に分かつており、中級から下級の貴族のもの)は二二基、乙組乙類(一椁一棺で、一般的に椁内を分室せず、下級貴族や平民のもの)は二五九基、乙組丙類(一椁または無棺で、平民あるいは貧民のもの)は一八三基である。時期が判明しているものとしては、(戦国晩期早段)(四期六段)のものは乙組甲類墓が四基、乙組乙

類墓が七一基、乙組丙類墓が八三基であるが、〈戦国晩期晩段〉(四期七段)には乙組甲類墓は見られず、乙組乙類墓は一六基、乙組丙類墓は一八基となる(注9)。「他に、無棺で副葬品も無く、編年できない丁類墓がある。」

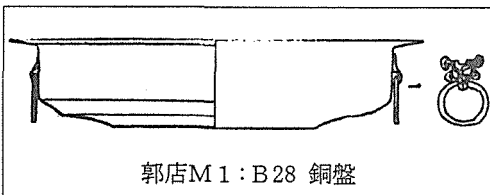
これによってわかるように、紀元前二七八年に秦將白起が郢を陥落させ、楚が東遷してより以降の〈戦国晩期晩段〉には、楚都紀南城(もとの郢)の周辺地域では、楚文化の特徴を継承した少数の遺民の墓葬はなお存在したものの、基本的には中級以上の楚国貴族の墓は見られなくなる。これらの貴族は、あるいは頃襄王に従って東遷し、あるいは江南へ流亡したのであって、故地にとどまった者は、人数も少なく、社会的地位にも大きな打撃を受け、大規模な陵墓を築く機会や実力を持つことは困難であった。郭店一号墓は、中級やや下の楚国貴族の墓であり、その規格は江陵九店の乙組甲類墓に相当するか、あるいはやや高い。当時の歴史的背景より見ると、その下葬年代は白起拔郢の紀元前二七八年より以降ではあり得ない。郭店一号墓に残された副葬品に戻ると、第一には、〈戦国晩期〉の楚墓によく見られる鼎・盃・壺・釭(酒器)の組み合わせが見られず、第二には、あらゆる〈戦国晩期〉の墓に比較的良好に見られる釜・釜蓋(なべ)・甑(こしき)・甕(水がめ)・蒜頭壺(ニンニクに似た形の小口長頸壺)などの秦文化に

かわる器物が見られない。これらは湖北省で発掘された〈戦国晩期晩段〉(紀元前二七八年以降)の各種の陵墓では多かれ少なかれ常見するものである(注10)。郭店一号墓にこれらが見られないこともまた、この墓の年代の下限を白起拔郢より以前とすべき有力な証拠である。

三

郭店一号楚墓の年代が紀元前二七八年より以降ではあり得ない以上、その具体的な年代は、荊門市博物館が最初に推定した「紀元前四世紀中期から紀元前三世紀初」という範囲から、さらに絞りこむことができる。

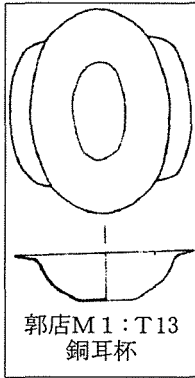
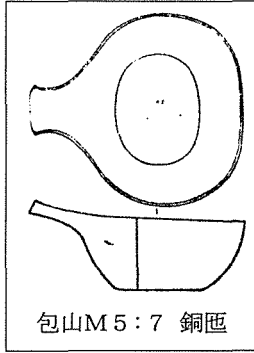
第一に、墓内に残された青銅器には、盤・匱(酒器)・耳杯・鏡・削(ナイフ)・劍・鏃などがある。銅盤(郭店M1:B28、下図)は縁が幅広く外側に折れ曲がり、沿面がやや内側に傾斜しており、腹は深く、腹の上部には獸面の鋪首銜環(環を付けた金具)が対称に施され、下腹は弧形に内収し、平底である。その形式



は荊門包山二号墓から出土した平底盤(包山M2:389)より新しく(注11)、江陵九店乙組三三号墓から出土したⅡ式平底盤(九店M33:1など)に近い(注12)。これらを比較すると、郭店墓から出た盤は対称な鋪首銜環を持ち、あきらかに(包山M2:389などよりも)やや新しい。包山二号墓の年代は、出土した竹簡の内容(大事紀年など)によって、紀元前三一六年あるいはやや遅いと判断される。九店三三号墓は、(戦国晚期早段)に属す。

銅匱(郭店M1:T39)の断面は楕円形で、縁は平たく、注ぎ口は長くて上向きに持ち上がっており、円底である。これは九店乙組墓のⅡ式匱(九店M620:16など)・Ⅲ式匱(九店M250:14)や包山五号墓から出土した銅匱(包山M5:7、右下図)に近い(注13)。

銅耳杯(郭店M1:T13、下図)は、双耳が三日月型で上向きに持ち上がっており、本体は楕円形で平底、



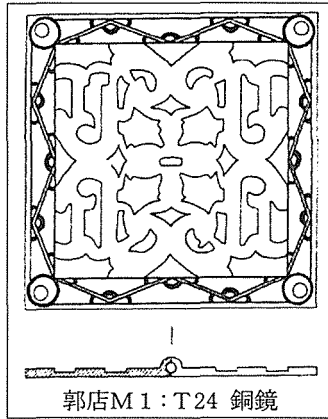
器面に裝飾はなく、器壁はやや薄い。これは江陵馬山一号楚墓から出土した円耳杯(馬山M1:17+20)に似る(注14)。馬山一号墓の年代は、原報告では(戦国中期偏晩)あるいは(戦国晚期偏早)とされていたが、研究の進歩によって、一般に(戦国晚期早段)だと認められている。

郭店M1から

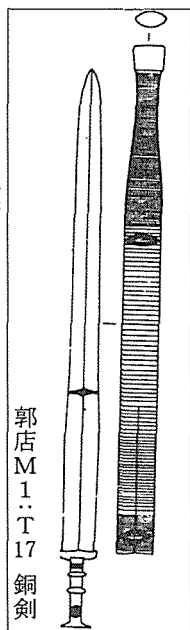
出土した銅鏡(郭店M1:T24、下図)は、方形で、紐は橋形、紐座は柿蒂紋、座外に鏤空四鳳紋を鑄出し、四隅には一つずつ乳釘紋

があり、縁は搾平である。その形式と紋飾は包山二号墓から出土した銅鏡(包山M2:432+3)に全く一致し(注15)、その時代も大きく離れないと考えられる。

郭店墓からは、格(刀身後端の鐔)を備え、柄に二つの箍(環状飾)と円首をもつ銅剣が出土した(郭店M1:T17、次頁図)。全長は七五・四cm、刀身の前端は内収、中央には脊が起隆しており、九店乙組墓のB型Ⅲ式剣(九店M55:6など)と一致する(注16)。この形式の、刀身が比較的長くて中



中央に脊が隆起している剣は、〈戦国晩期〉のものが多い。

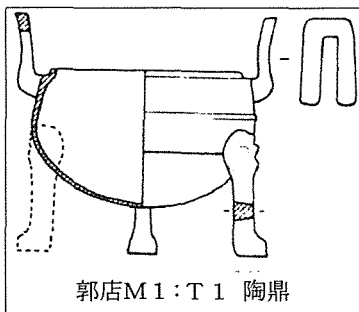


郭店M1:T17 銅剣

墓中から出た菱形の銅鏃(郭店M1:T19a、九六点)は、双刃で鋭鋒、中央に脊が隆起しており、包山四号墓から出土した菱形の銅鏃(包山M4:27-1)と一致する(注17)。包山四号および五号墓はみな〈戦国晩期早段〉に属す。

第二に、墓内に残された陶器としては、鼎・盃(酒器)・匕(さじ)・斗(酒をくむ器)などがある。陶鼎(郭店M1:T1、

下図)は(上端が)は子口となっており平沿で、長方形の耳が大きく張り出し、腹は深く丸底で、足は削られて断面が台形になっている。陶盃(郭店M1:B4、下段図)は直口で、腹は扁丸、丸底、肩上に環形の持ち手があり、片方に背があり、足の断面は菱形になっている。



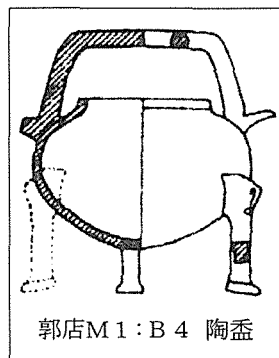
郭店M1:T1 陶鼎

これら二器の形式は、江陵馬山一号墓と九店乙組墓四期六段・七段から出た類器(馬山M1:26など)に近い(注18)。とくに、これら二器の足部の断面が台形・菱形になっていることは

江陵地区の〈戦国晩期〉の楚器の明確な特徴である。

江陵、当陽などの地域における比較的整理された楚墓の編年資料について言うと、〈戦国早期〉の倣銅陶鼎や倣銅陶盃などの三足器は、足部の断面が円形または楕円形のものが多く、表面を削らないのが一般的である。〈戦国中期〉には、この種の器物の足部断面は円形あるいは削って多面形とし、足の内壁にはしばしば三角形の溝を削り出す。〈戦国中期早段〉には一般にこの溝は上下貫通せず、〈戦国中期晩段〉には上下貫通し、まれには足部の断面が削られて台形あるいは菱形になる(注19)。

郭店一号墓から出土した陶斗(郭店M1:T15)は、江陵九店乙組四期六段の六一八号墓および五五〇号墓から出土したⅡ式斗(九店M618:1およびM550:8)に似ており(注20)、〈戦国晩期早段〉に属す。



郭店M1:B4 陶盃

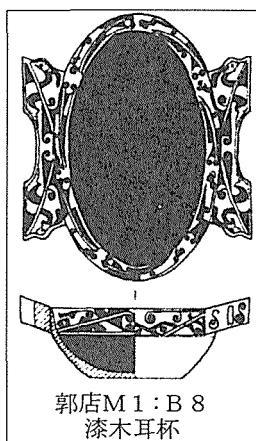
第三に、郭店一号墓の特徴ある漆木器として、耳杯・匱・枕架・梳(目の粗い櫛)・篋(細かい櫛)などがある。耳杯(郭店M1:T2およびM1:B8~B23の計一七点)は、器壁はやや薄く、方耳は上向きに持ち上がっており外側面は平直、中ほど弧形に内凹しており、器身は楕円形で平底である。紋飾には朱・褐色を用い、耳面には鳥首紋・卷雲紋が

対称に描かれ、口沿の外側面と耳の外側面には勾連雲紋が描かれ、耳の両端には竖式卷雲紋が描かれ、口沿の内側には変形鳳鳥紋と卷雲紋が描かれ、杯内中部には紅漆を、その他の部位には黒漆を施す。形式や装飾は包山一号墓から出たI式方耳杯(包山M1:14など)や包山四号墓から出たII式方耳杯(包山M4:4および包山M4:14など)と基本的に一致する

(注21)。ただし

郭店墓から出た耳杯は、壁がやや薄く、あきらかに精細さを加え、紋飾も流暢さを増す。

郭店一号墓の漆匱(郭店M1:B26)は、その形式が包山一号墓から出た漆盒(包山M1:17)と酷似しつつ紋飾が異

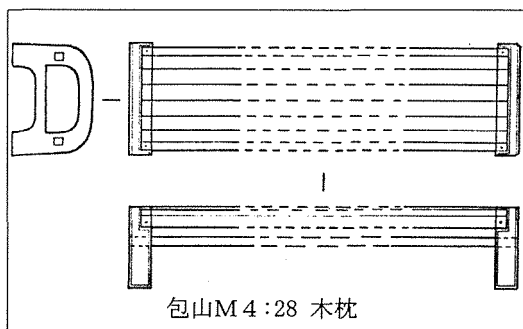


郭店M1:B8
漆木耳杯

なる(注22)。包山一号楚墓の漆盒には装飾が無いが、郭店M1の漆匱には外壁の中腹に鋪首銜環が左右対称に付けられており、蓋の中央にも銜環がある。製作技術も成熟と複雑さを加えており、「包山M1:17よりも」やや新しいと考えられる。

木枕架(郭店M1:T11)の両端は上端を弧形にした方框で、二つの框が二本の角材によつて接続されている。方框の上端内側に二層の凹みが穿たれ、その上に竹片が並べられて弧形の枕面を構成する。これに似た枕架は、江陵望山一号墓と包山四号墓から出ている(望山M1:B121および包山M4:28(下図))(注23)。

郭店墓からは、弧背の篋が一点(郭店M1:T29)、弧背の梳(郭店M1:T22)、平背の梳(郭店M1:T23)各一点が出ており、梳や篋の歯は上下両端が比較的水平直である。包山一号墓からは弧背の梳(包山M1:15)と篋(包山M1:16)



包山M4:28 木枕

各一点が出ており(注24)、両者を較べてみると、第一に、包山一号墓の梳篋は、郭店一号墓の梳よりも有歯部の占める割合が大きい。第二に、包山一号墓の篋は齒上部の高さが一定でないが、郭店のそれは整一である。この二つの要素はいずれも、郭店一号墓の梳・篋が(包山一号墓の梳・篋よりも)新しいことを示す。九店乙組墓から出た平背梳にはⅠ式(九店M26・9など)・Ⅱ式(九店M77・13など)の二種類があり、Ⅰ式は比較的ちいさいが幅広肉厚で、(戦国中期晩段)に属す。Ⅱ式はやや薄く、あきらかに幅は狭く高さは高く、(戦国晩期早段)に属す(注25)。郭店墓の平背梳は、九店乙組墓のⅡ式梳に近う。

以上の比較・分析によつて明らかのように、郭店一号墓から出土した各種の副葬品は、(戦国中期偏晩)および(戦国晩期偏早)の若干の特徴を備えており、そのうち一部の要素は包山一号・二号墓に近く、また一部の要素は包山四号・五号墓や馬山一号墓、九店乙組墓第四期六段の特徴に一致する。包山二号楚墓は紀元前三一六年あるいはそれよりやや遅くに下葬されたもので、包山四号・五号墓や馬山一号墓、九店乙組墓第四期六段の墓葬は(戦国晩期早段)の代表的な楚墓である。最も新しい器物の年代をその下限とするという考古学の分期断代の一般原則によると、郭店一号楚墓の年代は(戦国晩期早段)となり、その下限

は白起拔郢を降らない。また、(戦国晩期)の楚墓によく見られる盒(こ)・鈐(ほう)の類が郭店一号墓に見られず、秦文化のいかなる要素を持つ器物も見られないことから、この墓は(戦国晩期早段)のうち比較的早い時期、具体的には紀元前三〇〇年よりわずかに遅いものと考えられる。

原注

- (1) 「荊門郭店一号楚墓」(湖北省荊門市博物館、『文物』一九九七年第七期)を参照。
- (2) Sarah Allan and Crispin Williams: *The Guodian Laozi, Proceedings of the international Conference*, Dartmouth College, May 1998. The society for the Study of Early China and the Institute of East Asia Studies, University of California, Berkeley, 2000, P.19. [中文訳として『郭店「老子」東西方学者的対話』(学苑出版社、二〇〇二年)がある。]
- (3) 注(2)書三一頁。
- (4) 注(2)書一〇七頁。
- (5) 李学勤「先秦儒家著作的重大发现」(『中国哲学』二〇輯「郭店楚簡研究」專輯、遼寧教育出版社、一九九九年一月、一三〇—一七頁)を参照。
- (6) 王葆玟「試論郭店楚簡各篇的撰作時代及其背景——兼論郭

店及包山楚墓的時代問題」(『中国哲学』二〇輯「郭店楚簡研究」專輯、三六六～三八九頁)を参照。

(7) 王葆玆「郭店楚簡の時代及其与子思学派的關係」(武漢大學中國文化研究所編『郭店楚漢國際學術研討會論文集』湖北人民出版社、二〇〇〇年五月) 六四四～六四九頁および同「再論郭店竹書之時代及其文化背景問題」(池田知久監修『郭店楚簡の思想史的研究』六、東京大學文學部中國思想文化學研究室、二〇〇三年二月) 二五～三一頁を参照。

(8) 羅運環「論郭店一号楚墓所出漆耳杯文及墓主和竹簡的年代」(『考古』二〇〇〇年一期)を参照。

(9) 湖北省文物考古研究所編著『江陵九店東周墓』(科學出版社、一九九五年七月)(第四章第四段)を参照。

(10) この時期の墓葬の分析については、楊宝成主編『湖北考古發現与研究』(武漢大學出版社、一九九五年一月)第五章第一節「戰国末期墓葬儀」を参照。

(11) 湖北省荊沙鐵路考古隊『包山楚墓』(文物出版社、一九九一年一〇月)上冊一一〇頁圖六八・五を参照。

(12) 注(9)書二〇九頁圖一四一・一を参照。

(13) 注(9)書二〇九頁圖一四一・7・圖一四一・8および注(11)書三二一頁圖二二・三。

(14) 湖北省荊州地區博物館『江陵馬山一号楚墓』(文物出版社、一九八五年二月)七二頁圖六一・三を参照。

(15) 注(11)書一九五頁圖二二五・3・4を参照。

(16) 注(9)書二一五頁圖一四五・12・14を参照。

(17) 注(11)書三〇三頁圖一九九・1を参照。

(18) 注(14)書七六頁圖六三、注(9)書三八九頁圖二六一・三九一頁圖二六三および四一・一頁「器物分期圖」の四期六・七段を参照。

(19) 湖北省宜昌地區博物館・北京大學考古系『當陽趙家湖楚墓』(文物出版社、一九九二年三月)二二一頁圖一六七(B)「甲類墓器物分期圖」、二二三頁圖一六八(B)「乙類墓器物分期圖」、および注(9)書四〇八・四〇九頁圖二七七「乙組甲類墓器物分期圖」、四一〇から四一一頁圖二七八「乙組乙類墓器物分期圖」の「仿銅陶礼器」を参照。

(20) 注(9)書一八四頁圖一二五・13、三九〇頁圖二六二・3を参照。

(21) 注(11)書三四頁圖二〇・4、二九七頁圖一九二・1・2を参照。

(22) 注(11)書三四頁圖二〇・1を参照。

(23) 湖北省文物考古研究所『江陵望山沙塚楚墓』(文物出版社、一九九六年四月)九三頁圖六三・5、注(11)書二九六頁圖一九一を参照。

(24) 注(11)書三四頁圖二〇・5・6を参照。

(25) 注(9)書二九二頁圖一九一・3・4を参照。

訳者附記

本稿は、『江漢考古』二〇〇五―（総第九四期、湖北省考古学会編）に掲載の同名論文を、原著者の了解を得て翻訳転載したものである。原著者は一九五五年生。武漢大学教授。

（ ）内は原著にある注、〔 〕内は訳者が補った記述。また原著にない図版を注（1）および（11）報告書より適宜補った。なお、時代区分に関する呼称が日中間で異なることよって一部の議論が混乱していることを考慮し、〈戦国早期〉〈戦国晩期〉などの呼称には特に（ ）を付した上で原文のまま用いた。